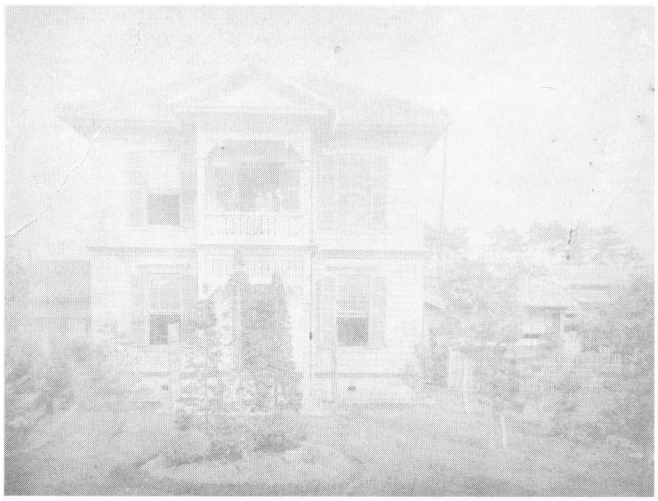
沼津市
明治史料館通信

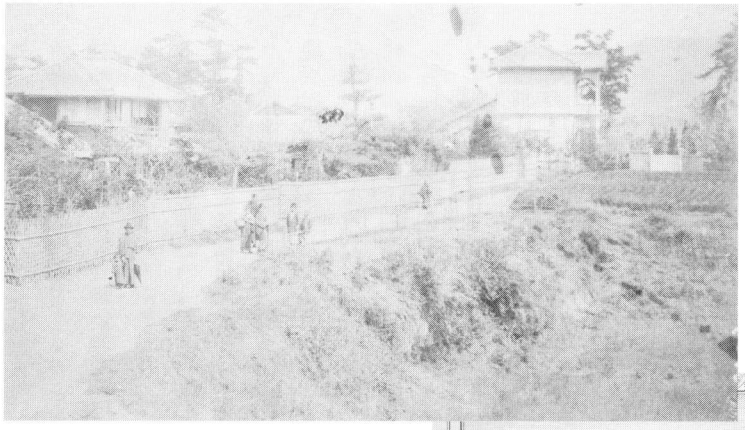
1989.10.25（季刊 年4回発行）Vol.5 No.3 通巻第19号

中村六三郎



▲沼津城内町にあった中村六三郎邸

明治30年代前半に写した写真か。
（中村通子氏提供）



◀側方より見た中村邸

手前にあるのは旧沼津城の堀か。
（中村通子氏提供）

『日本博覧図』に掲載された
中村六三郎邸▶

『日本博覧図』は全国の豪農・豪商など、素封家の豪邸を描いた銅版画を集成した本であり、中村邸が当時沼津を代表する洋館であったことがわかる。

シリーズ
沼津兵学校とその人材 ⑱

海軍・海事関係の人びと

沼津兵学校は陸軍の学校だったが、教授や生徒の中には、旧幕府の海軍出身者や、後に明治政府の海軍で活躍したり、商船学校の教育などに関係する人物が少なくなかった。以下に紹介するのはそれらの人びとである。

幕府海軍出身者

何と言っても一等教授五名の内三名までが幕府海軍の出身者であった。**伴鉄太郎・塚本明毅・赤松則良**である。三人とも長崎海軍伝習所に学び、さらに伴と赤松は咸臨丸でアメリカへ渡った経験を持つ。名高い沼津兵学校の数学教育は彼らの力によるところが大きい。この他、教授陣の中には、三等教授並**山本淑儀**（誉五郎）、教授方手伝**山田昌邦**（清五郎）といった幕府海軍出身者がいた。また、兵学校の管理者である静岡藩軍事掛の中には、幕府海軍の最高責任者であった元海軍総裁**矢田堀鴻**がいた。旧幕府海軍の主力は榎本武揚とともに箱館に脱走していたため、静岡に移住した海軍関係者は沼津兵学校で能力を発揮するほかなかった。静岡藩には明治二年一月までは海軍局が存在し、肥田浜五郎・佐々倉桐太郎・福岡久右衛門を頭とする海軍学校が清水港に開設される計画もあったが、結局それは実現しなかった。[1] 幕府海軍は静岡と箱館に分裂して消滅したのである。

山本淑儀
（山本録郎氏提供）

明治海軍で活躍した人物

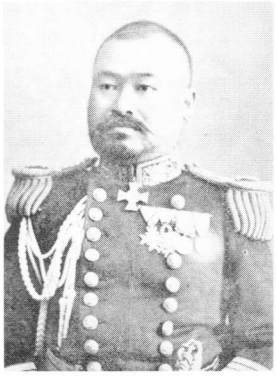
明治三年赤松則良は兵部省出仕を命ぜられて上京し、海軍兵学寮大教授に任命された。赤松とともに山本淑儀・山田昌邦・**西尾政典**（第一期資業生）の三名が、沼津兵学校より海軍兵学寮に転じ、大得業生となった。

その後、明治四年には兵学校第二期資業生**永峰秀樹・荒川重平・中川将行**らが沼津を中途退学して上京、赤松の誘いで海軍兵学寮の数学教官になるなど、沼津兵学校の廃校に前後して生徒の中からも政府の海軍に入る者が続出した。

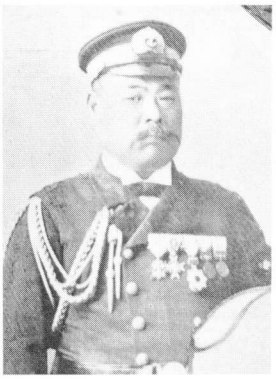
明治八年の官員録[2]によると、海軍省の職員として、赤松則良（少将兼海軍大丞）、伴鉄太郎（少佐兼水路権助）、山本淑儀（大尉）、永峰秀樹・荒川重平・中川将行（以上少尉）、**浅田耕**（主船寮権大属）、**片山直人**（同中属）、**熊谷直孝**（同大師）、**多門祐二**（同少師）、**並木元節**（兵学寮十三等出仕）といった沼津兵学校出身者の名前が見られる。明治十四年の官員録[3]では、これ以外に、**乙骨太郎乙**（御用掛准奏任）、**藤井惟利**（一等属）、**真野肇**（十二等出仕）、**佐竹万蔵**（十四等出仕）、**伊藤直温**（御用掛准判任）、**向山慎吉**（少尉）、**安原金次**（少尉）、**権田正三郎**（中機関士）、**永嶺謙光**（機関士副）らが加わる。この他、沼津兵学校や附属小学校出身で海軍に関係した者に、**伊藤重固**（横須賀造船所）、**平岡道生**（海兵教官）、**臼井藤次郎**（造船大監）、**加藤定吉**（海軍大将）、**西紳六郎**（海軍中将）らがいる。

同じ沼津兵学校生徒出身者でも永峰・荒川のように直接就職した者がいる一方、向山・永嶺・加藤・西のように海軍兵学寮や海軍兵学校に生徒として学んでからの者もいる。しかしいずれにしろ、武官・文官を問わず、少なからぬ数の沼津兵学校出身者が明治海軍の建設を支えたのである。特に造船・機関（赤松・熊谷・権田・臼井）、水路部（伴・伊藤直温）、兵学校

松山温徳
（『東京商船大学九十年史』より）


加藤定吉
（『日露戦争写真画法』より）

永嶺謙光
（永嶺忠雄氏提供）


向山慎吉
（『日露戦争写真画報』より）

教育（永峰・荒川・中川・平岡・真野）といった分野でその功績は顕著である。明治二十九年より初代諜報課長をつとめ、海軍きっての中国通と言われた安原金次[4]のように特異な仕事をした者もいた。

商船学校の教育者

沼津兵学校関係者には、海軍ではなく民間にあって海事教育に尽した人物もいた。

明治八年三菱汽船会社が創設した三菱商船学校は、日本最初の高級船員養成学校である。その初代校長になり、同校が十五年に官立東京商船学校となった後も引き続き校長をつとめ、海事教育の恩人と呼ばれた**中村六三郎**（一八四一～一九〇七）は、維新後沼津に移住した旧幕臣である。長崎に生まれた彼は、高島流砲術を学んだほか、長崎海軍伝習所にも学び、戊辰時には幕府農兵を指揮した。慶応四年長崎より江戸に上り、やがて徳川家に従い沼津に移住した。沼津兵学校の職員中に彼の名前はないが、浮島ヶ原の実測を担当するなど、何らかの形で兵学校にも関係したらしい（後年沼津兵学校記念碑が建てられる際、発起者五名の一人となっている）。明治三年上京し、政府に出仕、大学南校・文部省で大得業生・中視学・文部権大録・広島師範学校長などを歴任し、その後商船学校長となった。退官後は沼津に住み、海事思想の普及につとめ全国を講演してまわった。『小学幾何用法』・『小学対数用法』・『代数学用法』などの著書がある。墓は沼津市の蓮光寺にある。[5]

中村の後を受け、明治二十七年より二十九年まで東京商船学校長をつとめた**松山温徳**（一八五二～一九二一）も沼津兵学校第七期資業生の出身である。旧幕臣小松陳盛の次男である。なお、彼の義弟（妻の弟）石渡敏一は、静岡学問所に学んだ旧幕臣で法学博士・貴族院議員、その子石渡荘太郎は昭和戦前期に官僚・政治家として活躍した。松山は他に、東京船舶司検所長・東京地方海員審判所長・日本美術院幹事などをつとめた。[6]

日本海員掖済会の関係者

明治十三年に設立された海員掖済会（のち日本海員掖済会）は、海員の福利厚生を目的とする社会事業団体である。発起者五十四名中、伴鉄太郎・山本淑儀・矢田堀鴻・松山温徳・赤松則良・塚本明毅・中村六三郎ら沼津兵学校関係者がいた。[7] 赤松が会長となったほか、中村や松山らも理事として同会の運営に尽力した。

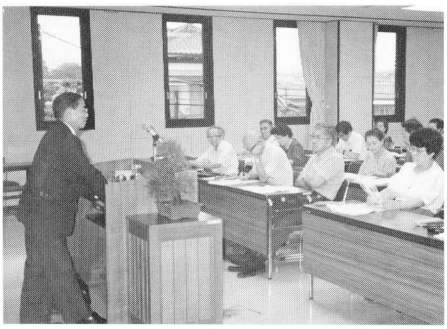
海や船をめぐる日本の近代化は、黒船来航に始まった明治維新を象徴する課題であった。長崎海軍伝習所以来の沼津兵学校の人脈もその中に位置していたのである。

(1)静岡県編集・発行『静岡県史』資料編16　近現代一。
(2)西村組出版局『掌中官員録』。
(3)青山長格編『明治官員録』。
(4)島田謹二『アメリカにおける秋山真之』上。
(5)中村については、『東京商船大学九十年史』『静岡県現住者人物一覧』『同方会誌』55など。
(6)『石渡荘太郎』、松山昌三郎氏提供資料などより。
(7)日本海員掖済会『掖済百年』。

お知らせ欄

◎企画展・歴史講座「沼津藩の人材」好評のうちに終了

8月1日より開催していました企画展「沼津藩の人材」は9月29日に終了しました。多数の市民の皆様に御覧いただいたほか、遠方より来館された沼津藩士の御子孫も少なくありませんでした。また同テーマの歴史講座にも熱心な聴講者が集まりました。今回の展示会を通じて多くの新史料・新史実が発見され沼津藩研究に新たな一頁を加えることができました。当館ではそれらを集積し、別の形で今後も活用をはかります。



秋山繁雄氏の講演風景（8月27日）

◎徳川慶喜書「沼津黌」扁額を常設展示室に展示しました

沼津市立第一小学校に伝来した徳川慶喜が書いた「沼津黌」の額を三階展示室の沼津兵学校コーナーに展示しました。これは明治十一年（一八七八）に集成舎・明強舎という沼津の小学校二校が合併して小学沼津学校が出来た際に、慶喜が揮毫してくれたものです。集成舎は沼津兵学校附属小学校の後身でしたので、小学沼津学校も徳川家とは浅からぬ縁故があるということで慶喜に揮毫を依頼したわけです。第一小学校より寄託を受け、今回当館で展示することになった次第です。

3階展示室に展示された「沼津黌」扁額

◎西浦村役場文書を移管、これから整理作業を進めます

一昨年国会において公文書館法が成立し、昨年より施行されました。これにより、国や地方公共団体は行政文書を歴史資料として保存することが努力義務とされ、全国的に公文書館や文書館の建設が進展するようになりました。

これまで沼津市では、民間のいわゆる古文書と呼ばれる私家文書については当館や歴史民俗資料館が収集・保存をはかって参りましたが、役所の行政文書については一部の永久保存文書を除くと大多数のものが失われました。特に、合併前の旧町村の役場文書は、合併の際や支所・出張所改築の際に無造作に廃棄されました。合併前の旧十二ヶ町村（沼津・楊原・片浜・大岡・金岡・静浦・愛鷹・大平・内浦・西浦・原・浮島）のうち、明治・大正・昭和戦前の古い役場文書が現存するのは、現在駿河図書館に保管されている金岡・愛鷹の二ヶ村だけです。しかも悉皆保存されているのは金岡のみで、愛鷹はセレクトされています。

ところが、当館では独自に調査を進めていたところ、西浦市民窓口事務所に失われたはずの西浦村役場文書が大量に残っていることがわかり、今年八月地元の了解を得て、それを当館へ移管する運びとなりました。数量は厖大なためまだ正確にはわかりませんが、時期的には明治より昭和三十年代に至るものです。今後これらの整理・分類作業を行い、目録を作成する計画です。

西浦村役場文書の一部

沼津市明治史料館通信　第19号
編集　沼津市明治史料館
発行　沼津市明治史料館
〒410 沼津市西熊堂372－1
☎〇五五九(23)三三三五